

田んぼが教えてくれたこと

豊里中学校 二年 土田 有紗

今年も無事に田植えが終わり、あたり一面
緑の田んぼが広がっている。風が吹くと小さ
な苗が揺れて、その様子を見るのは本当に気
持ちが良い。その景色を祖父がホッとした様
な笑顔で見えていたのが、とても印象的だった。

私の自宅の周りは田んぼが広がり、兼業農
家を営んでいる人がとても多い。小さい頃か
らどこまでも広がる緑や、穂が実った黄金色

2

の景色が当たり前だと思っていた。ところが、
今ではそれが失われてきている気がする。耕
作放棄されて、荒れはてた土地が増えてきて
いるからだ。どうしてそうなってしまったの
か？と考えた時、私の家の状況を見ただけで
もその理由が分かるような気がした。

私の家は祖父を中心とした米の兼業農家だ。
兼業と一言で言っても、出荷もするため毎年
ゴールデンウィークには、家族総出で田植え
を行うのが決まりだ。私も苗に水をかけたり、

運んだり、小さい頃から自分に出来る事を探して手伝ってきた。私が手伝えるのは田植えの時だけだが、カ仕事が多くクタクタになる位疲れ切ってしまう。私は三日間程の労働だけれど、米作りには一年を通して様々な作業があり、そのほとんどが重労働になる。しかも祖父が大病をしてからは、以前の様に作業をする事が本当に難しくなってしまった。私の家の様に男の人が祖父と父、二人しかいない場合一人が欠けてしまうと、今まで通りの

流れて作業する事はたちまち困難になってしまった。更に深刻なのは、近所でも良く聞く、農業の担い手である人達の高齢化だ。以前より機械化が進んできたとはいえ、大規模農家ではない限り、全ての作業の機械化は難しく、まだまだ手作業に頼る事が多い。多くの人が知っている様な、田植えや稲刈りだけではなく、土地を耕やし、養分を補い、表面を均すところから始まるのだ。毎日田んぼの様子を観察し、雑草を取ったり、肥料や農薬をし、

その都度適切な管理も必要である。重労働か
つ細かい作業のくり返しなのだ。また、農業
は天気との戦いでもある。天候を先読みし、
その時にベストの事をするのだ。あらかじめ
予定を立てても思い通りにいかない事も多く、
休む間もなく作業が続く事もある。父は仕事
が休みの日しか出来ず、祖父の負担は大きく、
必ずどこかに無理が出てきてしまう。一番の
労働者である祖父に何かあったら、我が家の
米作りは、たちまち困難になってしまうのだ。

このままでは近い将来、我が家も耕作放棄を
する事になってしまう。この事は、近所に目
を向けても、同様だというのが分かる。それ
程、田んぼで見かけるのは高齢者ばかりなの
だ。

「あなたは将来農業をやりますか？」と聞
かれたら、どう答えて良いか迷ってしまふ。
先祖代々続いた土地を守らなければいけない
と思う反面、あまり農業に魅力を感じないか
らだ。食料の自給率は横ばいで、食品の半数

以上は輸入に頼っている日本。スーパーに行
 けば、何の苦勞もせず、新鮮な野菜が季節を
 問わず手に入る。勞力を知っている私からし
 たら、お米もびっくりする程の安価で売られ
 ているのだ。あんなに苦勞して作っても、こ
 の程度でしか売れないのかと思うと、農業を
 やりたいという気持ちには到底なれない。き
 っとお米以外を作っている人も、同様に思っ
 ているのではないか。農業を始めるのは、と
 ても難しい事だ。体力や収入等問題が色々あ
 る。若い人達が、何の心配もなく農業をやれ
 る環境作りがまず必要だと思う。

私は、小さい頃から見なれたこの景色を守
 りたいと思う。誰かがやらなければ、あつと
 いう間に失われてしまうこの景色。失うのは
 本当に一瞬なのに、一度耕作放棄をされた土
 地はなかなか元に戻れない。私一人の力は小
 さくても、それがいつの日か大きく実るよう、
 出来る事を探してやっいていこうと思う。